横井孝先生を送る

国文学科主任　棚田輝嘉

横井孝先生がご定年をお迎えになりました。昨年度は影山輝國先生、牧野和夫先生が、その二年前には栗原敦先生が、と、この四年間で重鎮四人の先生方がご定年で本学科から研究三昧の日々へと向かわれたことになります。

「研究三昧の日々」、研究者にとってはこれほど魅力的な言葉はなく、年を追うごとに雑務ばかりが増えていく大学という現場にあって、すでにご退職なされた先生方にお会いすると、皆様一様にお元気で楽しそうで……。横井先生もまた、そのような日々に向かっていかれるのかと思うと、羨ましい気持ちばかりが……

と、ここで残される身であることを自覚すると、そうも言ってはいられません。国文学科も時代の趨勢の中で多くの改革をしてきました。大幅な改定を行った新カリキュラムも、来年度には3年目に入ります。しかし、「新」カリキュラムは「新しい」人材によってのみ行われるものではありません。本年度１００周年を迎えた国文学科ですが、その１００年を貫いて来たのは、確たる「国文学」の学統でした。国文学という専門の学こそが、大学の、そして在学生・卒業生の誇りの拠り所でもあります。それらの「学」を、凛として守り通し、日々進展する研究の先頭に立って、中古文学、特に、源氏物語をご研究なさってこられたのが横井孝先生でした。

横井先生は、20世紀最後の年、２０００年4月に、本学に教授として御着任なさいました。教員の採用は常に難しく、特に、坪内逍遥（早稲田）のシェークスピアと並び称された、学祖下田歌子の源氏の流れを継承しうる人物を求

めることは、大変なことでした。そうした中で、抜群の研究業績・研究能力をお持ちの、横井先生に御着任頂けたことは望外の幸運でした。本学が今なお、源氏研究の中心的な存在であり得るのは、これまでの諸先生のご尽力・御業績の賜物であるとともに、それを正しく引き受け、新たな生命を与えつつ、源氏学を一層発展させてくださった、横井先生のご尽力によるものです。

また、文芸資料研究所の所長としてのご活躍も、特筆すべき事柄の一つです。

平成20年4月から24年3月まで2期、平成27年4月から28年3月まで、前所長が学部長になったことによる残任期間、平成28年4月から令和2年3月までの2期、以上、4期＋1年の9年間、文芸資料研究所の所長をお務めになりました。この間、本学における源氏研究のみならず、中古中世に係る古筆切れ・古典文献の蒐集研究を精力的になさり、種々の講演会・展覧会も中心になって開催されました。今、その主要なもののみを列挙させていただきます。

平成21年　実践女子大学創立１１０周年・文芸資料研究所創立30周年記念「源氏物語へのアプローチ」
講演会・シンポジウム・雅楽演奏「源氏物語の雅楽」・展覧会（源氏物語　薄雲の世界）

平成22年　源氏物語特集「源氏物語と能」
講演会・展覧会（源氏物語をとりまく美）

令和元年　実践女子大学創立１２０周年記念「源氏物語、伝統と未来」講演会・シンポジウム・展覧会

このように見てきますと、本学の大事な節目節目に、本学の基幹学たる源氏物語研究とその魅力を、きちんと社会に価値を発信してくださったことが分かります。しかも、講演会・シンポジウムでは、来会者がほぼ毎回１００名を超えるという状況で、これは、本学のいかなる講演会・シンポジウムにおいても成し遂げえない偉業です。

他にも、国文学研究資料館や台東区立樋口一葉記念館などの外部組織との事業提携、さらに平成30年度私立大学ブランディング事業に研究推進室が申請し採択された「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」への協力なども、横井先生のご尽力に寄るところ大の出来事でした。最後の私立大学ブランディング事業は、今後も継続して行われる事業であり、横井先生の本学への置き土産であり、叱咤激励でもあると思っております。

残された我々にどれだけの力があるか、到底横井先生に及ばないとしても、及ぶべく、高い志を持って、先生の後をついていきたいと思います。

長きにわたって、本当にお疲れ様でした。そうして、これからの、先生の長い研究者生活が、ますます実り多きも

のであることを祈念いたします。

（たなだ　てるよし・実践女子大学教授）